

最後に一つ言葉を選ぶとすれば――

2020/06/14

Greatchain

もし私が生涯の終わりに、たった一つ、「この一言」というものを残して置くとしたら、それは私自身の言葉でなく、Tim Ray と David Wilcock の間のやり取りで、生まれた言葉である。ティムがデイヴィドに「あなたの言う〈より高い現実〉とか〈神〉とかいうものは、そもそも存在するのか？」と訊ねたとき、デイヴィドは無然として答えた――「**それ以外に何が存在する？**」

我々はそういう答え方しかできず、それ以外に生き方のできない者として、(言葉の曲解さえしなければ) 求道者として生きている。私を含め、多くの人、おそらくそうは考えてこなかった。いわゆる宗教教育を受けた人々さえ、そうは考えず、宗教という特殊な考え方があり、自分はそれにコミットして生きていると思っているだろう。

特記すべきことは、デイヴィド自身は、宗教教育をしているなどとは思ってもよらず、単に宇宙の構造(あり方)を明らかにする科学者だと、自分を考えていることである。これによって、我々が「科学」だと考えている唯物論などは、完全に吹き飛ぶだろう。そんなものは、喧嘩腰になって必死に理屈を捻り出す(ドーキンズのような)者たちか、あるいは神に対する復讐や征服を求めて、自己欺瞞をつくり出す(マルクスやソロスのような)者たちか、どちらかである。

これによって、「敬虔」とか「神聖」といった概念や思いがなくなるわけではない。なくなるのは、そんなものは科学ではないと信じ、かつ喧伝する、時代遅れの人々である。ウィルコックは、彼のブログ記事や講義を Divine Cosmos と名付けている。「神の宇宙」という意味だが、この cosmos は「不可分の一体」を意味している。唯物論者の宇宙は、universe でさえなく space (物的宇宙) であり、それが存在する世界のすべてだと考えている。

この度のコロナウィルスや、それに次ぐ欧米の暴動や破壊によって、何が起きているのか、その本質がよく見えてきた。その元凶は何と言っても、ジョージ・ソロスだと思われる。ソロスは、コロナウィルスの蔓延を、自分に対する天の助けであるかのように言い、自分の左翼グループ全体に対し、BLM (Black Lives Matter=黒人人権運動) に参加して、暴動と混乱を掻き立て、警察を廃止せよ(財源を断て)、というような指令を出した。

ソロスを逮捕せよという米政府に対する大量の請願にもかかわらず、トランプも米司法省も、今のところ動いていない。これは、トランプ側がこの無法行為を、この劇の筋書きとしての自殺行為と捉えているからであろう。今始まっている、この芝居の狂気の筋書きは、「深層国家」または New World Order 陰謀団の、滅びの筋書きである。これは例えば、ジョー・バイデンの「軍隊を用いてホワイトハウスを攻撃せよ」とか「警察を廃止せよ」といった主張に現れている。

バイデンは Creepy Uncle Joe などとも呼ばれ、退行性の脳軟化が明かであるにもかかわらず、彼を大統領として支持する者がかなりいるのは、狂気の沙汰でしかない。例えばかつて、イラクが「大量破壊兵器」をもっているとウソをついて、大規模な混乱と悲劇をもたらしたコリン・パウエルが動き出し、バイデン支持を表明している。民主党の何人かの女性議員なども、その乱暴な言動は、正常とは考えられない。しかしわが国では、彼らを全く正常な者として報じている。かつてブレット・キャバノーという、トランプの推薦する、米最高裁判事候補者が、高校時代に女性に暴行したという、状況から見て全く考えられない罪状で訴えられた。これをそのまま報道するのはメディアの義務か？（これはあまりにもひどい話なので、キャバノーのかつての女性同級生が数十人、壇上に上がって、口々に彼の誠実な人柄を訴えた。これは報じないのか？）

ジョージ・ソロスに戻る。私のよく引用する SOTN というブロガーは、おそらく最高の情報源であろう。彼はソロスを、「サウロン」という『指輪物語』に出てくる「邪悪な冥界の王」に喩え、ソロスを変形した顔の絵まで添えている。そして別の所で、「神は曲がった線を用いてまっすぐに書く」という諺を引用している。これは彼が、世界の情報を分析する人として、完全に信用できる人であることを示している。これはメディアの「科学的」情報とは、全く正反対のものである。

まず SOTN は、ソロスの左翼的な配下の、重要なものとして ACLU を挙げている。ACLU とは、American Civil Liberties Union（米自由人権協会）で、私が昔から「インテリジェント・デザイン運動」に関わっていたことから、これを目の敵にしていたが、これがソロスの支援する協会だとは知らなかった。これで謎が解けた。この団体が、良い運動もしている有名な市民権団体でありながら、なぜ、この合理的で良心的な ID 運動を、これほど憎むのだろうかという謎が解けたと思う。彼らは根源に、共産主義の悪なる親を抱えていた。これが今日まで、わが国でも「ダーウィン進化論」という時代遅れの説に従わなければならない、不思議なナゾを解くカギだった。仕掛け人は、強大な権力を持つ「サウロン＝ソロス」だった。これは、暗い牢獄に我々を閉じ込め、思考を停止させる理論である。

「サウロン＝ソロス」によって、神の敵と、神との関係がわかるように、ロンドン・パラリンピックの異常な障害者へのこだわりによって、正常者が神にどう意図され創られているかが、わかってくる。唐突なようだが、これは前に触れた。ロンドン・パラの演出者は、驚くべき異常な演出をして、我々を沈黙させた。それは、シェークスピアの最も美しい「神の作品」と言うべき『テンペスト』を、換骨奪胎して、故意に最も醜い作品にしたことである。

プロデューサーが誰かはわからないが、ソロスのような意図をもつ、神への復讐あるいは愚弄には違いない。誰が、舞台の真ん中を亀のように這いまわる身障者を、美しいと思うだろうか？ これを「美しいと思え、犯罪者どもめ」と、アンティファのように恫喝してくるのが共産主義者である。NHK テレビが、このような身障者たちの映像を、数秒だけサブリーミナルのように映し、やめてしまったことがある。

——以上